HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 円地文子研究［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 齊田, 春菜 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第16560号 |
| Issue Date | 2025-06-30 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/95690 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Saida_Haruna_review.pdf, 審査の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　齊　田　春　菜

主査　教　　授　水　溜　真由美
審査委員　副査　教　　授　押　野　武　志
副査　准 教 授　南　　陽　子
副査　名誉教授　中　村　三　春（北海道大学）

学位論文題名

円　地　文　子　研　究

・当該研究領域における本論文の研究成果

『源氏物語』を現代語訳するなど古典文学に造詣が深く、特に女性の立場から人間関係の機微を描いた、昭和期を代表する日本の女性作家・円地文子の作品については、これまでも古典作品との関わりや、女性論の立場などから研究が進められてきた。一方で、戦前期から戦後期に至るまで円地が書き続けた少女小説ジャンルに属する作品群の追究は乏しく、また、その古典文学との繋がりについても、小説内部の構造や、小説作品相互の連関において、物語の持つ問題が厳密に分析されてきたとは言いがたい面がある。

その中にあって申請者は、本論文において、第一に、多数執筆されながら現代においては閑却されてきた円地による少女小説の実態を、雑誌『日本少女』および『少女サロン』など発表媒体に対する徹底した文献学的な調査と、作品「富士のある窓」から「麗しき母」への本文の転用、「秋夕夢」の初出と収録本との本文異同、さらに改作された「あほうどり」と「信天翁」との対照などから追跡し、それらを全体として少女の成長や母子の絆などといった、既に確立された少女小説ジャンルの枠組から逸脱する仕方で、独自の様式を形作ったものとして評価した。第二に、円地の小説「妖」「二世の縁　拾遺」『女面』『なまみこ物語』「遊魂」「交配花」など、『源氏物語』や『春雨物語』等の古典との関わりにおいて、女性が「書くこと」によって自らの存在理由を問い直した長・短編の作品群については、物語の語りの技法や、古典にまつわる作中作とその独自な利用の仕方を精緻に分析し、そこに巫女・憑依・霊媒など、古典から学んだ独特の様式性の存在を看取した。第三に、円地作品において少女と対をなす老女の表現について、小説「蛇の声」「猫の草子」『彩夢』を順次取り上げて論じ、同じく古典と関連する作中作と絡めた巫女や憑依を描く手法を、老女に少女が同居するような円地の独特な「老女もの」の特徴として抽出し、これをこの作家の最終的な境地として位置づけた。この論述の過程において、実証的な文献学的調査と、古典およびブレイクの詩や藤田嗣治の絵画などをも含む近現代作品との関連の追究を行い、さらに語り論や受容理論の観点から、物語を改作して作品中に嵌め込む構築手法が解明された。これにより、全体として物語を他の物語の〈語りなおし〉の営為と見なし、それが作品を重層的に活性化するとする申請者の斬新な理論が実践されたのである。

これらのことが一定の説得力を伴って詳細に究明されていることから、本論文は円地文子研究の

領域において、高い研究成果を上げたものと認められる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、先行する円地研究における問題点を整理した上で、円地作品を古典文学や作中作の物語を〈語りなおし〉する構造の観点から再検討し、特に少女・老女・巫女などのキーワードに重点を置いて独自に究明して、その中で女性が「書くこと」の意義を突き詰めようとした希代の女性作家として円地を位置づけ直すことを試みた。その目的のために、作品の初出掲載雑誌や初収単行本と全集本文を突き合わせるなどの文献学的な調査を徹底し、それを基盤として、主要な少女小説と長・短編小説を多数取り上げて理論的に分析・解釈を施し、それらが渾然一体化した構築物として円地の作品総体を評価するに至った。これにより、円地文学における物語の構造と機能の問題について、研究史を更新する真に新たな見方が提起されたものとして認められる。これらのことから、本審査委員会は、本論文を高い研究水準にあるものとして判断した。

ただし、意欲的な論考であるだけに、それに付随する若干の問題点も審査委員会においては指摘された。すなわち、第一に、古典文学作品や作中作などの〈語りなおし〉に着目した立論を行っている割には、その古典作品や、あるいは近代・現代の小説作品などにも数多く見られる同様の手法についての目配りが不足していること、第二に、申請者は少女小説などの過去に確立された文芸類型の枠組からの逸脱を、円地独特の資性として評価しているが、その逸脱にどのような価値を認めて評価するのかの、原理的な観点からの論拠が薄いこと、第三に、古典の改作も含めた作品の内部構造や人物論・語り論においては徹底した追究が行われているが、さらにそれを超えたより広い歴史的・社会的な視点において、円地文学の意義を評価する論述が乏しいことなどである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の高い研究水準と達成度を損なうものではない。それらは申請者が今後も円地および日本文学に関する研究を持続し、視野を広げて論述をさらに拡充・徹底することによって、十分に解決の期待できる課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。